

幼児・児童における見知らぬ人物に対する危険認知の発達過程 —向社会性の発達を阻害しない防犯教育の在り方に関する検討—

プロジェクト代表者：清水 由紀（教育学部・准教授）

1. 問題と目的

近年、子どもの安全に関する意識が高まっている。学校や地域において、子どもを被害から守るための様々な防犯対策が、ハード・ソフトの両面においてなされている。一方で、子どもに「他人を見たら泥棒と思え」という防犯教育をせざるを得ないのか？という問いは、教師や親にとって深刻である。子どもの安全のためには、誰にもついて行かないように言いかけねばならないが、同時に幼児期・児童期は、向社会性（相手のために自発的に行う思いやり）が育まれていく重要な時期だからである。

危険認知の発達については、これまで、10歳児でさえ未知人物からの誘いに伴う危険を認知していないという結果が得られる一方で(Moran, Warden, Macleod, Mayes & Gillies, 1997), 幼児でも見知らぬ人物の誘いにはついて行かないが、そこには人物の既知・未知性や誘いの手口（緊急度）の要因が影響すること(江尻・内田, 2006)などが示されている。ただし、向社会的行動とのジレンマ場面における危険認知の発達については、これまで Shimizu(2008)において検討されているのみである。

そこで本研究では、幼児における危険認知と向社会的行動の発達について明らかにすることを目的とする。特に子どもとストレンジャーの目的・欲求が同じである場合（e.g., 子どもが駅に向かっているときに駅に連れて行ってほしいと頼まれる）に子どもの行動がどのように変化するのかについて検討する。

2. 方法

1)対象：さいたま市内の私立幼稚園に通う幼児 62 名。内訳は下記の通りである。

年中児 30 名（男児 15 名，女児 15 名）平均年齢 5 歳 4 か月（範囲 4:10～5:11）

年長児 32 名（男児 17 名，女児 15 名）平均年齢 6 歳 4 か月（範囲 6:0～6:11）

2)手続き：個別に面接。パソコンにより Figure1 のような絵提示しながら行った。提示例は下記の通り。

【一致条件】 ある日、〇〇ちゃん（対象児の名前）はお父さんと駅に向かって歩いていたのですが、途中でお父さんとはぐれてしまいました。〇〇ちゃんは駅に行けばお父さんに会えるんじゃないかと思って駅に向かって歩いています。

【統制条件】 ある日、〇〇ちゃんはお父さんとお散歩をしていたのですが、途中でお父さんとはぐれてしまいました。〇〇ちゃんは、お父さんはどこにいるのかなと探しながら歩いています。

（共通）そこへ、車に乗った男の人（女の人）がきて、「すみません、駅に行く道がわからないので、一緒に車に乗って、駅に行く道を教えてくださいませんか？」と言いました。〇〇ちゃんは、何度も駅に行ったことがあるので、駅に行く道はよく知っています。

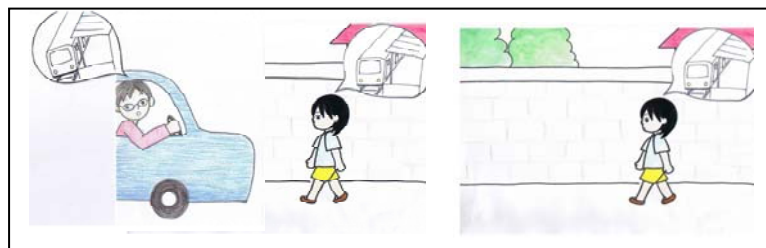


Figure 1 提示した絵の例

①危険認知課題：ストレンジャーに対して危険認知が働くかどうかを調べるため、「〇〇ちゃんだったらこの男の人（女の人）と一緒に行くかな？行かないかな？（行かないかな？行くかな？）」と尋ねた。

②向社会的行動課題：ストレンジャーに対して向社会的行動をとるかどうか調べるため、「〇〇ちゃんだったらこの男の人（女の人）に道を教えるかな？教えないかな？（教えないかな？教えるかな？）」と尋ねた。

3. 結果と考察

危険認知課題における回答について、学年による違いをFisherの直接法により検定した結果、学年による回答の偏りは有意だった($p<.001$)。残差分析の結果、年中児よりも年長児の方が、「ついて行く」という回答が少なく「ついて行かない」という回答が多かった。さらに条件による違いがあるかどうかを学年別に調べた結果、年中児においては一致条件と統制条件のいずれにおいても「ついて行く」という回答が多いが、年長児においては特に統制条件において「ついて行く」という回答が少なくなっていることが示された($p<.06$)。さらに、ストレンジャーが男性と女性の場合について行きやすさに違いがあるかどうかを調べた。その結果、年中児においてはストレンジャーの性別にかかわらずついて行きやすいが、年長児の一致条件において、ストレンジャーが男性の場合はついて行きにくい、女性の場合にはついて行きやすくなるという違いがあることが示された(Figure 2)。同様の結果は、向社会的行動においても見られた(Figure 3)。

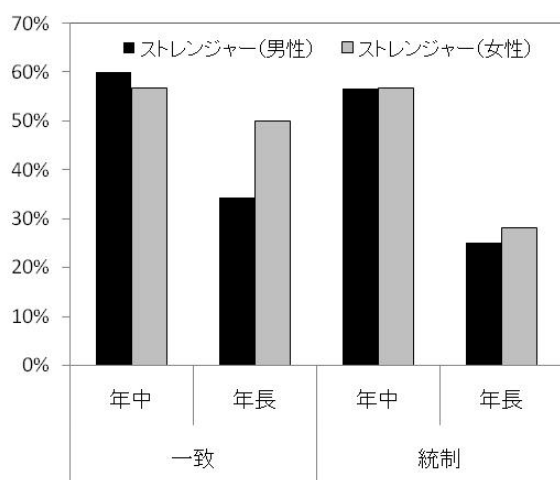


Figure 2 危険認知課題における「ついて行く」という反応の条件別の割合

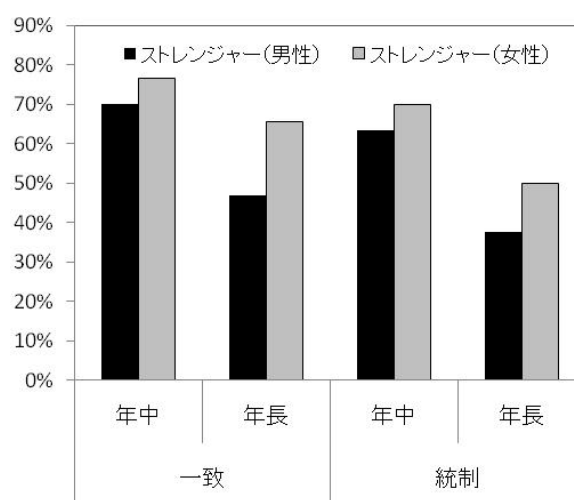


Figure 3 向社会的行動課題における「道を教える」という反応の条件別の割合

以上より、第1に危険認知能力は4歳児にはまだ備わっておらず5歳児頃から発達すること、第2に5歳児においても、自分の欲求とストレンジャーの欲求が一致しており、かつストレンジャーが女性である場合にはついて行きやすいことが示唆された。

幼児はまだ自ら適切な対処方略を考えることはできないため、安全教育を行う際には「人」ではなく「場面」に焦点化し、場面別にとるべき行動について、具体的に教えておく必要があると考えられる。

4. 引用文献

江尻桂子・内田伸子(2006). 幼児・児童における見知らぬ人物に対する認知の発達過程. 幼児の安全教育に関する総合的研究—幼児の危険認識の発達に及ぼす社会・文化的要因の影響—財団法人セコム科学技術振興財団研究助成平成17年度研究成果報告書, 47-55.

Moran, M., Warden, D., Macleod, L., Mayes, G., & Gillies, J. (1997). Stranger-Danger: What do children know? *Child Abuse Review*, 6, 11-23.

Yuki Shimizu (2008) Danger avoidance or prosocial behavior? 20th Biennial ISSBD(International Society for the Study of Behavioural Development) Meeting, Würzburg, GERMANY.